

北島春石

きたじま しょうせき

小説家。明治十九年生れ、大正十二年歿（一八六—一九

三）。本名英一。硯友社に據り、尾崎紅葉歿後は柳川春葉に就いた。

春葉の代表作『生々ぬなか』は、実は北島春石の代表作だったといふ。他にも著名作品の代表作としてゐたといふが、一方で寄食してゐた倉田啓明が春石作品の多くを代表作としてゐたと桜井均が傳へてゐる（『茶落』の作者）昭和五十二年八月二十五日文治堂書店）。

著作には、先づ花散里の筆名で『金波銀波』（大正二年四月十日春江

堂書店）、『誰が子』（大正二年九月五日春江堂書店）等があり、次

び春石名の『此一戦』（大正三年十月八日春江堂書店、『武俠叢書』）、

『小夜子』（大正四年五月五日春江堂書店）、『添はれぬ仲』（大正

四年十一月五日湯淺春江堂）、『雁一羽』（大正四年十一月十日湯淺

春江堂）、『春色五人女』（大正十年五月五日春江堂）、『風流色二

味線』（大正十年六月一日春江堂）等。翻譯は、レオ・トルストイ作

『カチエーシヤ（復活）』（四版・大正四年一月十五日春江堂）、歿

後刊行の普選劇『光榮の日』（三版・大正十三年六月二十日春江堂）、

『海から歸つた女』（昭和十四年五月十五日新文藝社）等がある。